例文提示とグロスづけに関する指針

例文提示にあたっては必ず通し番号をつけ，また少なくとも例文（記述対象方言）と訳文の対応がわかるように工夫を行う。この工夫に関して，読みやすさと国際誌における例文提示の慣習を考慮し，本誌では以下のいずれかの方式を用いることを推奨する。なお，下記はあくまで推奨される例文提示法であり，例文と訳文の対応が明確になる工夫がされている限り，例文提示法はこれに限らず執筆者の判断に委ねるものとする。

方式 1 最も素朴なやり方として，仮名書き（あるいは音素表記）で文節ごとにスペースをいれ，文節ごとの訳を付す方式がある。

(1) フャーノ トビオル
ハエが　飛んでいる

方式 2 形態素分析を行う場合，それに即した表記（音素表記）を用いる。1 行目に形態素分析を行った例文，2 行目に形態素ごとのグロス，3 行目に全文訳を示す。

(2) hwyaa=no tob-i-or-u.
ハエ=NOM 飛ぶ-STM-PROG-NPST
「ハエが飛んでいる。」

読みやすさのために，仮名書きの例文を加えても良い（1 行目に追加）。

(3) フャーノ　トビオル
hwyaa=no tob-i-or-u.
ハエ=NOM 飛ぶ-STM-PROG-NPST
「ハエが飛んでいる。」

方式 3 形態素分析を行わない理論的立場にたつ場合や，形態素分析を省略しても議論の中身に影響が出ない場合，以下のように，例文の形態素分析をせず，2 行目では単語を構成する文法カテゴリーラベルをピリオドで区切って並べるだけでも良い。

(4) hwyaano tobioru.
ハエ.NOM 飛ぶ.STM.PROG.NPST
「ハエが飛んでいる。」

この方式であれば，仮名書きの例文に対してグロスをふることも可能となる。

(5) フャーノ　トビオル
ハエ.NOM 飛ぶ.STM.PROG.NPST
「ハエが飛んでいる。」

いずれの方式においても，方言例とグロスの左端が揃うようにする。その際，原稿作成用 Word ファイル（別ファイル）に示す通り，MS Word でタブを用いて揃えるとよい。グロス略号はなるべく一般言語学で広く認識されているものを用い，新規にグロスを追加する際はその英訳をもとにグロスを作成する。例えば (2) における/tobioru/の連用形/i/に対して，不定形（infinitive; INF）などさまざまなグロスが考えられるが，ここでは語幹拡張辞（stem extender）とし，略号として STM を新規に採用している。例文で使用したグロス略号をすべて列挙した略号リストを引用文献リストの直前につける。表の形式で挿入してもよい。